

“TOTAL HIP ARTHROPLASTY WITH BULK FEMORAL HEAD AUTOGRAFT FOR ACETABULAR RECONSTRUCTION IN DEVELOPMENTAL DYSPLASIA OF THE HIP.”

Title: **脱臼および亜脱臼性股関節症の臼蓋再建を**

塊状自家大腿骨頭骨移植で行った人工股関節置換術

Authors 著者: 小林千益、斎藤直人、縄田昌司、堀内博志、Richard Iorio、高岡邦夫

Abstract 抄録:

背景: 脱臼および亜脱臼性股関節症の臼蓋再建を塊状自家大腿骨頭骨移植で行ったセメント人工股関節置換術の長期成績は、報告によって著しく異なる。そこで、我々は臼蓋塊状自家骨移植で行った人工股関節の成績を調べ、その結果に及ぼす因子を検討した。

方法: 脱臼および亜脱臼性股関節症の臼蓋骨欠損を塊状自家大腿骨頭骨移植で再建し、Charnleyの手技と人工関節を用いて人工股関節置換術を行った。30人の患者(手術時平均年齢57歳)の37関節を術後10~26年間(平均19年間)経過観察した。Croweの股関節脱臼および亜脱臼の分類で、Group IIが16関節で、Group IIIが17関節で、Group IVが4関節であった。

結果: ソケットの移植骨による被覆率は5%~49%で(平均33%)であった。29ソケットは真股臼内に設置されており、8ソケットはやや近位に設置されていた。最近の経過観察時、股関節機能は全例とも優れ、X線像上、全移植骨が癒合し、固定の破綻を生じた人工股関節はなかった。

結論: 脱臼および亜脱臼性股関節症の著しい臼蓋骨欠損を塊状自家骨移植で再建し、セメントを用いて行う人工股関節置換術では、患者の手術時年齢が48歳以上で、ソケットの移植骨による被覆が50%を超えなければ、優れた長期成績が期待できる。もし、真股臼レベルでソケットの腸骨による50%以上の被覆が得られない場合は、ソケットをやや近位に設置し、そのような適切な被覆を得ることを推奨します。